

ITという言葉がある。IT業界とかIT企業などと使ったりする。Information Technologyの略である。教育界、学校では、近年ICTという言葉がよく使われる。Information and Communication Technologyの略である。ITが情報技術ならICTは情報通信教育となる。ICTはITにコミュニケーションの要素を含めたものである。

昨日11月11日（月）に、保原高等学校にて「ICT教育実践研修会」が催された。小学校や中学校では、電子黒板やデジタル教科書、タブレットなどの導入が市町村単位で進んでいる。では、高校ではどのような状況なのか。また、保原高校は梁川高校と統合し、2023年度から新しい高校になる。新統合校の校舎は現在の保原高校の校舎を使うようになる。保原高校の教室や生徒を見ることができる好機と思い出かけてみた。

参観した主な授業は、2年生の国語科、現代文Bと3年生の地歴・公民科、日本史Bである。日本史Bでは、選挙制度の変遷について学習し、日本の政治に関心を持たせ、将来を担う意識を高めることをねらった授業であった。ICTの観点からいうと、電子黒板を使ってパワーポイントで作成したスライドを生徒に見せながら授業を進めていた。この方法であれば黒板にチョークで板書する時間が省ける。生徒にはスライドを印刷したものを資料として配布してあるので、ノートをとる必要もない。浮いた時間を生徒が話し合う時間や教師の説明にまわせる。この時間の力点は、ノートを取りながら知識を学ぶのではなく、生徒が自分の考えをグループ内で発表し、他の考えにも触れさらに考えを深めていくことである。アクティブ・ラーニング（AL）という言葉があるが、AL型授業といってもよいものである。

では、実際の生徒の様子はどうか。「制限選挙」と「普通選挙」はどちらがよいか、という問いには、2名の生徒が制限選挙の方がよいと答え、あとの生徒は普通選挙の方がよいと答えた。普通選挙が当たり前となっている現代において、選挙制度の変遷に触れながら、あえて制限選挙についても考えることで思考が進む。一人の女子生徒がグループの話し合いで制限選挙を主張していた。それが理論的であり、なかなか反論できないものであった。私は自然とそのグループの話し合いに参加していた。参観者としてあるまじき行動ではあるが。その女子生徒の考えをもっと引き出したかったのである。

もう一つの問いが、投票率の低下が問題視されているが、どのようにしたら政治に興味・関心が出るのか、というものであった。中には、スマホで投票できるようにすればよい。授業できちんと政治について学習できるようにすればよいなどの意見もあった。前述の女子生徒は、普通選挙でだれでも投票できるようにしているから、自分の1票で何も変わるはずがないと考え、投票に行かなくなる。制限選挙にして、無作為に選ばれた人だけが投票できるようにすれば投票率は上がる。投票率が高い高齢者のことを考えた政策が多く、若者のことを考えたものが少ない。それも関心が向かない原因だ。若者のことを考えた政治家が出てくれば変わるかもしれない。こんな調子で次から次へと自分の考えを出していった。

高校生や若者は、政治について何も考えていないように思っている世の大人たちは多いかもしれない。実際には、いろいろなことを考えていることがわかった。きっと、考えてはいるが、それを出す場、発信する手段がないのではなかろうか。高校の授業もそうである。教師が一方的に説明、解説する知識伝達型の授業では、このような高校生の意見は出てこない。今回のような形式の授業であったからこそ、若い感性による鋭い指摘や考えが表出されたのである。一参観者のつもりが授業に参加してしまい、心地よい満足感を抱きながら梁川へと車を走らせた。